

・この世に不変の価値はない

・欠点・規格外は最強の武器

・「今」「ここ」が最高に
素敵と周りの人に感じてもらう

・「前例なし」はチャンス

・行動なくして幸せなし

ファッションが
教えてくれる
人生のヒント

ファッションに携わるようになったのは、大学院の修士課程から。大学ではイギリスの地域文化を専攻していたが、歴史にせよ、文学にせよ、諸先輩の層は厚い。東大には既にトップクラスの研究者がそろっている。「いつまでたってもこの人たちの下にいることになる」と目を付けたのが、イギリスで生まれたスーツや紳士の概念だった。誰も扱っていない分野で「アカデミズムが扱うテーマじゃない」という批判もあったが、研究をきっかけにメンズファッションについての執筆依頼が相次ぐようになった。女性のファッションについても書くようになり、男女両方のファッションについてのエキスパートになった。新聞での連載を頼まれ、当初は「ファッションジャーナリスト」を名乗るつもりだったが「長過ぎる」と却下された。そして「服飾史家」を提案された。それが定着した。

仕事が仕事を呼び、縁が縁を呼ぶ。書くだけでなく、明治大に特任教授として招かれ、教育に携わった。講演する仕事もこなす。最近は多彩な人脈を買われ、ホテル事業のコンサルティングも手掛ける。「退屈している暇がない」と笑う。

ファッションは時代を映す。変わり続ける。若い世代には「今ある価値観は絶対じゃない。たくさんの人が正解だと言っていることが、10年経てば見向きもされなくなる。時代の価値観に合わせるんじゃなく、やりたいことをやったらいいと思う」と呼び掛ける。

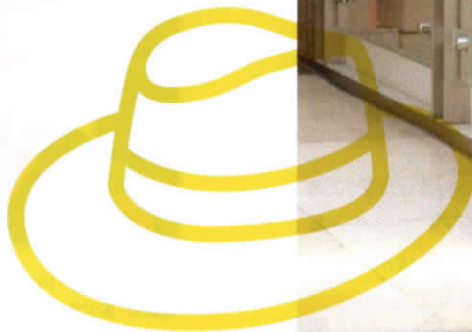
自身も本年度で大学の仕事を離れ、起業の準備を進めている。「どんなに大変な状況になってもその時にしか見られない景色や感情を味わい尽くせばいいんです」

服飾史家……………中野 香織さん

絶対の価値観なんてない

これまでなかったお仕事。

なかの・かおり／富山市出身。1981年に東京大学文科III類入学。85年に文学部卒業後、教養学部教養学科イギリス科に学士入学、87年卒業。在学中の19歳から旅行記事、映画コラムなどを書く仕事を始める。1994年に東京大学大学院総合文化研究科博士課程を単位取得満期退学。英国ケンブリッジ大学客員研究員、東京大学非常勤講師などを経て、服飾史家・エッセイストとして独立。新聞・雑誌・ウェブマガジンなどで連載記事を多数執筆。2008年より明治大学国際日本学部特任教授を務めた。著書に『神士の名品50』（小学館）、『モードとエロスと資本』（集英社新書）、『ダンティズムの系譜 男が懂れた男たち』（新潮選書）など。



「ファッションについては相当書いているけど、ネタに困らない。いつも新しい現象が起きている」。中野香織さんは、ミウラに使われる香料から最先端のモードまで、古今東西のファッションについて書く。歴史や音楽、映画、時事問題など多彩なエッセンスを織り交ぜたウイットに富んだ語り口が持ち味だ。

服飾史家を名乗る。「本当なら『服飾史研究家』と言うべきところ。でも、少し間違っているのが自分らしいと思う。研究者としては異端と見てくださって(笑)」。この服飾史家という肩書きは自分で考えたものではない。いくつかの偶然が重なって生まれたものだ。

もともとファッションについて興味があったわけではない。卓球少女だった中学から高校時代は「制服とプラスアルファくらいしか持っていなかった。トレンドを追っかけるなんてことはなかった」と振り返る。代わりに、近所の県立図書館で開架の人文系の本はほとんど読んだ。もともとは医者志望。ただ解剖実験に恐怖を覚え、文転した。東大の文科III類に入った。

物書きになったのは19歳。旅行雑誌がメキシコの旅をレポートする女子大生を探していた。条件はスペイン語ができること。あいさつ程度しか話せなかったが、それで面接を受ける度胸を買われて、採用された。中野さんの書いた記事が好評で、その後も映画のレビューなども含め書く仕事が舞い込んできた。